

生死の極限状態の時に 自らの命を客観視する凄さ

先の当 HP 記事「大震災の障害者の死者・行方不明者は2.5%」で、「避難のために移動に不自由がある障害者や高齢者が津波の犠牲になったであろうことは、残念ながら容易に推察される。津波が迫ってきたあの瞬間、障害者はどういった思いだったのか…」と記したが、「筋ジス患者『あきらめましょう』 介助交代の合間の死」の報道記事を目にした。

記事の概要は、自宅で80代の祖母と人工呼吸器をつけて車いす生活の筋ジスの30代半ばの青年が、近所の親族が駆けつけ津波が迫る中で助け出そうとしている時に「あきらめましょう」と呟いたとか。

丁度ヘルパーが午後2時半頃に帰り、4時に交代のヘルパーが来るまでの空白の時間帯に大地震。

祖母や親戚の方も必死に助けようとしただろうが、人工呼吸器をつけていただけに人手も時間も足りず、「ヘルパーのいる時間帯だったら助けられたかも……。緊急時に助けてくれる近所の人などを見つけておく必要があると痛感した。」と、ヘルパー派遣の自立センター長は話したよう。

この報道記事を目にして、現職時代に夜間の火災を想定した避難訓練の時に、筋ジスの青年達が「どうせ俺たちは自力で動けないから、焼け死ぬしかないよな～」と話していたことを思い出した。

災害に遭遇した時、自力では逃げられない彼らは、そうした時の自らの命の予想・覚悟をしながら日々過ごしているということか……。

生死の極限状態の時に自らの命を「あきらめましょう」と客観視的語彙を報道記事の青年が呟いたことが、そのことを象徴しているように思われる。

そのことと共に、そうした覚悟の上でなおかつ、日常において前向きな彼らの生きる力というエネルギーは、どこでどう自ら育んできたのだろうか……。

東日本大震災と福島原発事故から、国民の多くは従来の物質文明に価値を追い求めた結果の限界とむなしさを知り、大震災後しきりに使われている「絆」の語彙に象徴されるように、日々過ごす意識改革を自らに問うている時だけに、彼らに「生きる」ということへの思考・思索のヒントをぜひ授けてもらいたい。